



38 巖栖十八羅漢困碁図

富岡鉄斎没後90年

鉄斎

— 書簡が語る名作秘話 —

2014・9・9(火) - 11・30(日)

前期 9月9日(火) - 10月13日(月・祝)

後期 10月18日(土) - 11月30日(日)

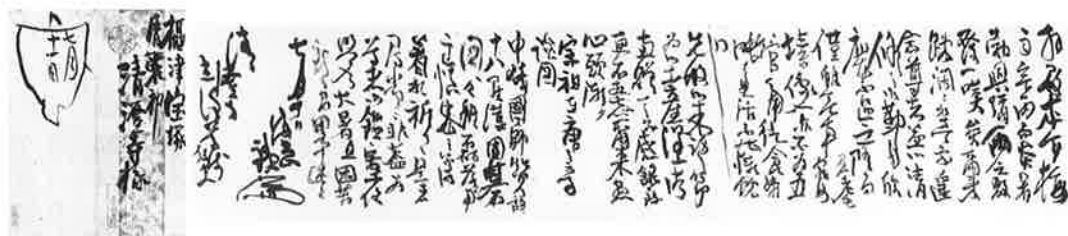
10時~16時

月曜日休館 ただし9月15日、10月13日

11月3日・24日は開館、翌日休館



37 弘法大師在唐遊歴図



68 坂本光浄宛書簡

近代文人画の巨匠・富岡鉄斎（1836～1924）はきわめて筆まめで、長い生涯のなかで数多の書簡をしたためた。現存する書簡は、慶応元年（1865）の大田垣蓮月宛（No.42）から、亡くなる三日前の大正13年（1924）12月28日に書かれた清荒神清澄寺法主坂本光浄宛（No.69）までの約60年間にわたり、文面には折々の動向や関心事はもとより、鉄斎の人間性が映し出されている。また年齢とともに推移する書風からは、その変遷を辿ることができる。とりわけ晩年にみられる奔放で雄渾な筆致は、書画作品と同様に高い評価を得ている。

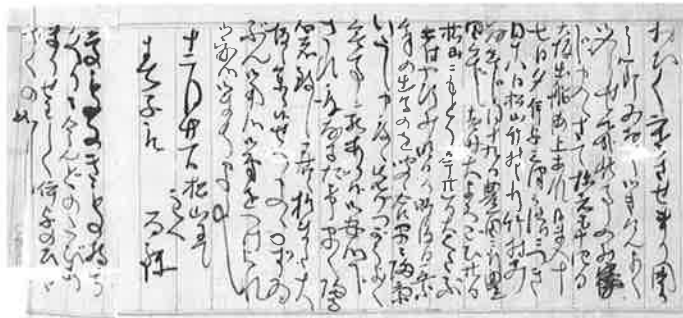
旅先からの便り 「…さて拙者も十四日大坂出船、海上あれ日ま入、十七日夕伊与三津ヶ浜につき、同十八日松山竹村へ行、竹村みな無じ。同十九日豊田（年々本氏も）豊田無じ。老母大よるこび。二十日松山にもどり、今二十一日大くたぶ二付やすみ、明日か明後日蒸気の出るのを聞合早、帰京いたし申度候。…」(No.44)との便りが、京都の鉄斎留守宅に届いた。宛名にある春子（名は富岡ハル、1847～1940）は愛媛県喜多郡長浜村出身で、明治5年（1872）3月に鉄斎に嫁ぎ、翌年2月に長男・謙蔵を出産したばかりであった。「万卷の書を読み、万里の路を行く」ことを実践した鉄斎は、日本全国をくまなく旅して歩いたが、留守宅の家族にはいつも心を配り、蓮月風のやわらかな仮名交じりの文を頻繁に出して近況を伝えていた。本状は、同6年12月にはじめて妻の故郷を訪れた時に書かれたもので、詳細に親類縁者の無事を伝え、「なるだけ早く帰る」の文面に情愛が込められている。この折、松山の地で描かれたのが《寒江万里図》(No.1)である。前景の土坡に数樹を配し、江水を隔てた向こう岸に遠山を望む景観が金地の大画面に広がる。中国山水画から学んだ平遠の構図法を用いた意欲作であるが、翻って賛には「私の絵には全く画法がないと誰がいう。世間で画家と呼ばれないのは幸いだ。明治6年12月27日、愛媛県松山の宿で描いた。また明日帰京するので、あわただしくとった筆が思うように動かなかった」との意が書かれ、若き鉄斎の画技に対する矜持が窺える。

文人が旅をする目的の一つには、地方の支援者（パトロン）のもとに滞在し、詩文書画を制作して資を得ることにあった。愛媛県三津浜で海運業を営む石崎平八郎（号は寄鶴、1838～1919）は、家業の傍ら文雅を愛し、田能村直入はじめ京阪の文人墨客と交流を持っていた。妻春子が愛媛の出身であることから鉄斎も明治6年、8年、19年、22年と石崎家に逗留し、《三津浜漁市図》(1875年、清荒神清澄寺)などの作品を描いている。また「先般御来訪、何之御風情無之遺憾ニ存候。其節高話竹林山水図一揮、乍拙劣進上致候」(No.47)との書簡からは、互いの家を往来するほど交情を厚くし、時に書画談義に花を咲かせていたことが知られる。同32年には、平八郎の還暦を祝して《寿山福海図》(No.9)、《寿山福海書》(No.10)が制作された。この頃鉄斎は、新聞に報じられるほどの病を患っていたようだが、「…貴所之祝慶品斗ハ是非勉強致度候と医者之禁戒ヲ不用、強而病中大骨折。密画三幅全ク落成致候。左右仙人渡海、中寿山福海之意。近年希有之作と心ニ誇り申居候。近年ハ愚生書画依頼人多ク、非常之勉強過度疝疝之大病、苦痛不可忍也。今暫万事抛棄、一意静養致し候。外ニ愚生御祝之為、一揮致し候。…」(No.49)とあり、病をおして平八郎のために祝慶の書画を制作したことが書かれている。三幅対をなす《寿山福海図》は、中幅に蓬萊山図、左右幅には春木南溟筆の「八仙人図」をテキストにした仙人渡海図が極彩色で描かれる。硬さは見受けられるものの、先人の図様に学びながらも鉄斎の仙境図へと昇華させた60歳代の会心の作である。

鉄斎が文雅の交わりを結ぶ支援者は各地に居り、滋賀県東近江で酒造業を営む野口正忠（号は柿邨、1822～



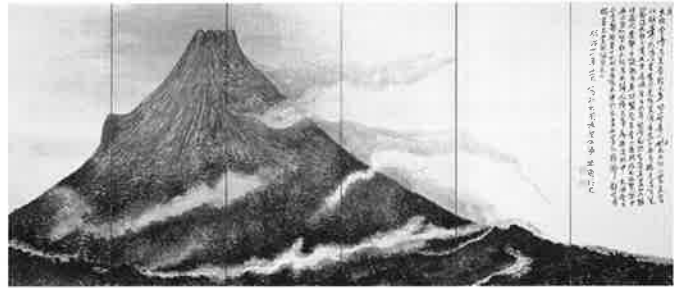
1 寒江万里図



44 富岡春子宛

1893) もそうした一人であった。親交は幕末期よりはじまり、明治8年に鉄斎が生涯ただ一度の富士登頂を果たした際には、甲府野口家を拠点としていた。柿邨は漢詩人の梁川星巖、画家の日根対山など当世一流の文人墨客と親密な交流を行っており、詩文書画に通じた文化人であった。田園の春夏秋冬の景を四幅に描きあげる《幽風詩意図》(No.6)は、その附属書簡に「此絹本四枚、則詩経中之幽風之図、四季ニ配当ス。日本人此図之筆者ハ恐ラ(ク)ハ有まじ。能々御覧可被下候。是ハ詩経ヲ読て農業之本分、国ニ忠愛アル意ヲ知るべし。普通遊戯之画山水と同視スル事あるべからず。太骨折れる。但し柿邨翁之高眼、其評承り度候」(No.50)とあり、高い見識をもつ柿邨なれば、『詩経』に着想を得た渾身の作を解してくれるに違いないとの思いが窺える。詩趣に富んだ情景のなかに「幽風七月詩意図」に拠った図様が点在する画は、みずから自負する通り見事な出来映えである。

《富士山図》屏風制作秘話 「…来ル天長節六七時頃ニ、貴所へ筆ヲ携へ、屏風認ニ罷出可申と予備致し居候。貴所ニハ無御障り無之候哉。尤一日ニテ埒不明バ翌日へ懸揮毫之積り也。御都合如何承り度候。…」(No.53)との葉書が、京都市東洞院松原で唐紙商を営む柴田松園(名は治右衛門、1852~1935)宅に舞い込んだ。天長節すなわち11月3日に、鉄斎が筆を携え赴いた先で揮毫



8 富士山図(右隻)

したのが、「明治三十一年十一月、松園雅契の宅に於いて書き併せて識す」との識語がある《富士山図》(No.8)屏風である。この時、六曲一双のうちの右隻の遠望図のみが描かれたのか、左隻の山頂図も同時に制作されたのかは定かでないが、ともかくも、こうした大作がわずか一日か二日のうちに他家において仕上げられたという事実には驚きを覚える。もともと、若い頃より旅先での揮毫を為してきた鉄斎にとっては、制作の場がわが画室でなくてはならないというこだわりはなかった。緑青、群青、朱などの濃彩をふんだんに施した《阿倍仲麻呂明州望月図・円通大師呉門隱栖図》(辰馬考古資料館、重要文化財)も、大正3年(1914)に兵庫県西宮市の酒造家・辰馬悦叟(1835~1920)の隠居所・高沈吾廬に、約半月ほど滞在した折に制作された六曲一双屏風である。大量の岩絵の具を携えていったというが、左隻には同家秘蔵の「山碧水明」印(辰馬考古資料館)が捺されており、客地での出会いが画面に印されている。

速筆で知られる鉄斎だが、こうした珠玉の名品が造作なく創出されたわけではない。《溪山真楽図・天空海闊図》(No.15)の添状(No.57)には、「…就テハ貴嘱之屏風、大ニ延引万々御海涵被下候。追々暖気ニ相成候節、奮發可致…」、また別に「屏風も其中ニハ何と致し可申候」と、制作の遅れに対しての苦しい言い訳がなされている。おそらく大画面を構成するに足る題材が揃わないために、熟慮していたのだろう。鉄斎はほとんど下絵を描くことはなかったが、着手するまでには時間を要したようである。鉄斎の書簡にはよく「勉強」との文言が出てくる。これは画想を得るために和漢の書物を渉獵し、先人の画譜・画論をひも解き、入念な考証を重ねる作業を意味している。そしていざ筆を執ると、一气呵成に筆先から独自の絵画世界を創出したのである。

《富士山図》の図様には、平沢旭山の『漫遊文章』「登富士山記」の挿図がテキストに用いられていることは先学によって検証されている。鉄斎はあらゆる富士山関係の資料を調査し、本図を描くにあたっては実証に基づく資料を用いることで実像に迫ろうとしたのだろう。なお、右隻の賛文には、江戸時代の文人画家・池大雅が富士登山をした折の逸話に取材する自作の詩文「題三老登嶽図」を寄せている。

詩文の添削一雨山からの書簡 「…別紙擬致御一覽可被賜候。其節ハ辰馬翁墓銘御潤筆を御分恵被成下、毎々後学小生を御重愛被下候、御厚情感銘ニ不堪候。此墓銘ニ付而ハ先般已ニ御厚賜を蒙り候ニ、今又重而御分恵ニ預り候。而バ余り過分にて恐縮御辞退申度存候へ共、長者之賜ニ候故謹而拝登致候。厚顔愧謝々々。…」(No.77)との書簡が、鉄斎のもとに届けられた。差出人は漢学者の長尾雨山(名は甲、1864~1942)、別紙^[註]とは添

削を頼まれていた詩文の答案で、書簡には《辰馬悦叟墓碑銘》(No.31)の添削に伴う過分な謝礼への謝辞が述べられてあった。鉄斎が「題山碧水明印影」なる詩文を草したのは、大正9年(1920)に西宮の辰馬悦叟が他界し、その墓碑銘を撰した潤筆料に、同家が所蔵していた「山碧水明」印を譲り受けたことによる。鉄斎は大正3年に辰馬家を訪れて以来、頼山陽刻になるこの印章を所望していた。いかに鉄斎の申し出とはいえ、同家は家宝を手放しあぐね、富岡家と相談の上、存命中にかぎり貸与するとの約束が交わされた。何も知らない鉄斎は大喜びし、早速「山碧水明」印を手に入れた欣快を詩文書画に表した。菅井梅岡の画になる頼山陽宅「水西荘図」に拠って山紫水明処図を数多く描き(No.32)、さらには自作の「題山碧水明印影」を画賛に寄せ(参考《山碧水明処図》1921年、『鉄斎研究』第47号-19所収)、いずれの作にも「山碧水明」印を誇らしげに捺していた。

漢文(漢詩)は文人にとって欠くべからざる基礎的教養であり、鉄斎は6歳のときから素読を習いはじめ、長じては天台僧の羅漢慈本に学んで研鑽に努めてきた。のちには小野湖山、谷鉄臣、江馬天江、宮原潜叟、市村水香、中村確堂らに添削を乞い、晩年には親子ほども年齢の差がある長尾雨山、内藤湖南の教養を受けていた。大正7年に鉄斎の子息・謙蔵が没してからは、とりわけ雨山に厚い信頼を寄せ、中国文人的教養を備えた格調高い文体を愛し、詩文創作の頼りとしていた。絶筆《榮啓期図》(1924年)の賛にある自作の詩も雨山の添削になるものである。鉄斎は謙蔵を通じて上海移住時代から雨山を知っていたようだが、忘年の交わりを結んだのは、大正3年に雨山が帰国し、京都に居を構えてからと推察される。鉄斎は宋代の文人・蘇東坡を敬愛し生日を同じくすることを誇りとしていたが、雨山もまた東坡を尊崇していた。雨山が主催する東坡の生日を祝う寿蘇会に喜んで参加し、東坡赤壁遊を記念した大正壬戌赤壁会には、賛助を惜しかなかった。在野にあつて学識を活かしながら資を得る難しさを鉄斎は身をもって知っており、ゆえに添削に伴う過分な謝礼は支援の意味もあったのだろう。鉄斎は苦境を乗り越え、己の学問を探究する雨山を好ましく思っていた。



〔参考〕山碧水明処図

書と画は起源を同じくし、筆法が共通するとの考えから「書画一致」といわれ、また詩文と画は情景描写という点で通ずることから、画を「無声詩」、詩を「有声画」と呼んできた。そして詩と書と画の総てに優れることを「詩書画三絶」といい、文人の理想とされた。この理想を追求し、実現しえたことから、鉄斎は最後の文人と謳われている。

没後90年を記念した本展では、書画の揮毫や交友関係を語る書簡に焦点をあて、制作された名作と併せて展示する。情報を伝達する手段である書簡は時に雄弁であり、「無声詩」である画の制作背景を解き明かしてくれる。また造形芸術としても高い評価を得ている鉄斎の書簡は、「書画一致」を表すものといえよう。書簡を通して鉄斎芸術の神髄をお楽しみいただければ幸いである。(柏木知子)

〔註〕鉄斎と雨山の添削のあり方を見る貴重な資料である。全文を紹介して後学を待ちたい。

富岡鉄斎草稿

西宮辰馬悦叟老人。与頼氏親善。屢貽家釀於三樹氏。々報之以乃父山陽翁手鐫山碧水明印章。篆鐫古雅可愛也。余亦与老人相好。老人没後嗣子悦蔵有余所乞。余書以贈焉。悦蔵輟贈印章聊為潤筆。余大誇曰。愈于蘇秦六国相印者。遠万々矣。題山碧水明印影。

長尾雨山答案

西宮辰馬悦叟老人。与頼氏交善。屢贈所釀美酒於三樹子。々報以其父山陽翁手刻印章。文曰山碧水明。篆法古雅可愛也。余亦与老人有旧。及老人没。其嗣子悦蔵乞余銘墓。悦蔵乃以此印章貽余。為潤筆。蓋老人遺志也。余大詫曰。此勝于蘇秦六国相印者。遠万万矣。

【主要参考文献】

『墨美』第222号「富岡鉄斎書 辰馬悦叟墓碑銘」(墨美社、1969年)。長尾正和「鉄斎と雨山の交遊」(『文人書譜12 鉄斎』月報、淡交社、1979年)。入矢義高「鉄斎の詩文」(芸術新聞社『別冊墨 第10号 富岡鉄斎 人と書』、1989年)。『没後八十年 最後の文人 鉄斎-富士山から蓬莱山へ-』(出光美術館、2004年)。『十一屋コレクションの名品~野口柿郎をめぐる文人たち~』(山梨県立美術館、2012年)。

《出品目錄》

[富岡鉄斎筆]

番号	名 称	制作年		年齢	寸 法	材質・技法	員数
1	寒江万里図	明治6	1873	38	122.5×171.0	紙本金地墨画	1面
2	老槐墨戯図 板倉槐堂書簡合装	明治9	1876	41	62.2×48.7	紙本墨画	1幅
3	畝傍山御陵之図			40代	113.0×52.0	紙本淡彩	1幅
4	猿田彦神図			40代	131.4×51.5	紙本淡彩	1幅
5	竹林幽栖図			40代	150.0×51.5	紙本淡彩	1幅
6	幽風詩意図	明治26	1893	58	各135.6×49.2	絹本着色	4幅対
7	楠妣庵図	明治27	1894	59	140.4×49.6	絹本着色	1幅
8	富士山図	明治31	1898	63	各153.0×352.5	紙本着色	6曲1双
9	寿山福海図	明治32	1899	64	各127.8×50.1	絹本着色	3幅対
10	寿山福海書	明治32	1899	64	41.5×138.0	紙本墨書	1面
11	一咲戯筆帖	明治33	1900	65	各14.4×24.3	紙本淡彩・墨画	1帖
12	三老登嶽図	明治34	1901	66	129.6×50.3	絹本着色	1幅
13	幽谷君子図	明治34	1901	66	135.2×33.3	紙本墨画	1幅
14	名所十二景図	明治37	1904	69	各138.0×51.9	紙本着色	6曲1双
15	溪山真楽図・天空海闊図			60代	各155.2×362.5	紙本着色	6曲1双
16	祝鯛図			60代	36.0×64.6	紙本淡彩	1幅
17	鉄老談芸卷			60代	27.5×295.7	紙本墨書	1卷
18	隠士牡丹花肖柏像	明治38	1905	70	127.6×49.8	絹本着色	1幅
19	桜巷堂書	明治38	1905	70	27.0×102.7	紙本墨書	1面
20	賜楓書楼印譜	明治44	1911	76	各26.8×15.4	紙本鈐印・墨書	1冊
21	袞詠歌	大正1	1912	77	37.4×41.0	紙本墨書	1幅
22	静楽帖	大正2	1913	78	各径14.3	紙本着色	1帖
23	耶馬溪図			70代	71.3×94.5	紙本淡彩	1幅
24	火用慎書			70代	113.2×25.7	紙本墨書・墨画	1幅
25	室内裝飾注意一端書			70代	30.4×102.9	紙本墨書・墨画	1卷
26	古仏龕図 添聯	大正7	1918	83	133.0×45.5 (聯)各128.3×17.9	紙本着色 紙本墨書	3幅対
27	印癖卷	大正8	1919	84	31.1×132.4	紙本鈐印・墨書	1卷
28	漁邨暮雨図	大正9	1920	85	131.0×32.3	紙本墨画	1幅
29	澆墨山水図	大正9	1920	85	径57.0	絹本墨画	1幅
30	吉野乃面影図	大正10	1921	86	123.2×30.6	紙本墨画	1幅
31	辰馬悦叟墓碑銘	大正10	1921	86	各89.4×36.2	紙本墨拓	4幅対
32	頼氏山紫水明荘図	大正10	1921	86	28.8×41.7	紙本墨画	1幅
33	利市三倍図	大正11	1922	87	134.0×32.5	紙本淡彩	1幅
34	辰馬悦叟頌德碑	大正11	1922	87	183.0×101.0	紙本墨拓	1幅
35	東坡笠履図	大正12	1923	88	16.3×52.2	紙本着色	1面
36	蓬萊僊境図	大正12	1923	88	144.8×40.5	紙本着色	1幅
37	弘法大師在唐遊歴図	大正13	1924	89	132.9×33.3	紙本淡彩	1幅
38	巖栖十八羅漢因甚図	大正13	1924	89	144.6×39.2	紙本淡彩	1幅
39	前田正名記念碑	大正13	1924	89	204.0×260.4	紙本墨拓	1幅
40	蓬萊山図	大正13	1924	89	144.8×39.2	紙本淡彩	1幅
41	前赤壁賦書	大正13	1924	89	各32.7×264.4	紙本墨書	3冊

[富岡鉄斎書簡]

番号	名 称	制作年		年齢	寸 法 (全長)	材質・技法	員数
42	大田垣蓮月宛	慶応1	1865	30	15.8×164.4	紙本墨書	1通
43	大田垣蓮月宛			30代	14.7×52.3	紙本墨書	1通
44	富岡春子宛	明治6	1873	38	15.4×32.9	紙本墨書	1通
45	富岡春子宛	明治9	1876	41	23.7×33.8	紙本墨書	1通
46	富岡春子宛	明治10	1877	42	27.6×40.2	紙本墨書	1通
47	石崎平八郎宛			40代	14.8×43.5	紙本墨書	1通

番号	名 称	制作年		年齢	寸 法 (全長)	材質・技法	員数
48	石崎平八郎宛	明治28	1895	60	26.0×21.0	紙本墨書	1通
49	石崎平八郎宛	明治32	1899	64	17.3×87.5	紙本墨書	1通
50	野口正忠宛	明治26	1893	58	18.0×49.0	紙本墨書	1通
51	楠妣庵図添状	明治27	1894	59	26.2×54.7	紙本墨書	1通
52	神田香巖宛			50代	18.9×52.9ほか	紙本墨書	7通のうち
53	柴田松園宛	明治31	1898	63	14.1×8.9	紙本墨書	1通
54	柴田松園宛	明治38	1905	70	17.7×64.8	紙本墨書	1通
55	亀谷岩宛	明治34	1901	66	18.4×60.9	紙本墨書	1通
56	名所十二景図添状	明治37	1904	69	15.5×57.8	紙本墨書	1通
57	山根宛			60代	18.0×73.6ほか	紙本墨書	3通のうち
58	隠士牡丹花肖柏像添状	明治38	1905	70	24.5×68.8	紙本墨書	1通
59	奥喜太郎宛	明治44	1911	76	19.2×28.0	紙本墨書	1通
60	前田正名宛	大正1	1912	77	19.1×86.7	紙本墨書	1通
61	松田竹園宛			70代	各25.5×16.3	紙本墨書	1通
62	園田湖城宛	大正9	1920	85	各23.5×13.0	紙本墨書	1通
63	辻道仙宛	大正10	1921	86	17.4×72.8	紙本墨書	1通
64	東坊城徳長宛	大正11	1922	87	19.0×135.9	紙本墨書	1通
65	平之亮禪宛	大正12	1923	88	18.7×81.3	紙本墨書	1通
66	高田新助宛	大正12	1923	88	18.5×42.0	紙本墨書	1通
67	坂本光浄宛	大正11	1922	87	18.7×52.8	紙本墨書	1通
68	坂本光浄宛	大正13	1924	89	20.7×98.4	紙本墨書	1通
69	坂本光浄宛	大正13	1924	89	22.0×91.0	紙本墨書	1通
70	坂本光浄宛	大正13	1924	89	22.0×91.0	紙本墨書	1通
71	坂本光浄宛	大正13	1924	89	21.5×92.0	紙本墨書	1通
72	中島菊齋宛			80代	22.0×16.5ほか	紙本墨書	1通
73	諏訪蘇山宛			80代	24.0×46.0	紙本墨書	1通
74	黒川正弘宛			80代	(24.2×594.4)	紙本墨書	12通のうち
75	笠原墨華堂宛			80代	(27.2×646.9)	紙本墨書	18通のうち

[参考出品]

番号	名 称	筆 者	制作年		寸 法	材質・技法	員数	備 考
76	前田正名交情記	藤井善言	大正4	1915	32.8×93.1	紙本墨書	1巻	
77	長尾雨山書簡 富岡鉄斎宛	長尾雨山	大正10	1921	23.6×52.7	紙本墨書	1通	附「題山碧水明印影」草稿
78	羅振玉書簡 富岡鉄斎宛	羅振玉	民国9	1920	各24.3×16.8	紙本墨書	1通	

- ・ 出品作品は下記の通り2回にかけて展示します。但し一部重複することがあります。
前期 9月9日(火)～10月13日(月・祝) 後期 10月18日(土)～11月30日(日)
- ・ 下記の日程で当館学芸員による展示説明会を行います。
9月20日、10月11日、11月1日・22日 各土曜日の午後1時30分より
- ・ 次回展覧会
鉄斎美術館開館40周年記念「鉄斎の器玩－清風三昧－」 2015年1月4日(日)～2月11日(水・祝)
- ・ 鉄斎美術館・宝塚市立中央図書館共催企画展(於:宝塚市立中央図書館聖光文庫)
「富岡鉄斎と長尾雨山・内藤湖南」 2014年12月7日(日)～2015年2月10日(火)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シー番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>